

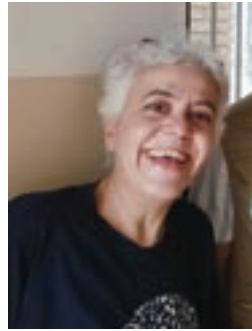
15

4万8000人以上の犠牲、92%以上の建物の損壊

ガザで15か月を生き延びた人々から、その経験といまの想いを聞きました。

(2月8日から2月12日のインタビューです。その後の状況の変化を反映していませんが、みなさん先行きの不安を語っていました)

15か月の危機下の生活と想い



私たちが欲しいのは 停戦の継続と尊厳が守られること

マジダ・アルサッカさん

(ガザでの当会のパートナー団体でナワール児童館の母体である「文化的で自由な思考協会」理事。2006年と2015年来日。2月11日インタビュー)

一時停戦が始まりイスラエル軍による攻撃が止まったので、状況は良くなりました。しかし、物資の搬入は進んでいません。食料はないし、あってもとても高く手が出ません。

多くの人たちが、避難先から元の家のあったところに戻っていますが、戻った先はとても住めるような状況ではありません。気温が低く暴風雨が続けているので、ビニールでできたテントは吹き飛び、寒くて外では眠れません。

私自身の家もほぼ全壊で壁も天井もないので、中に住むことはできず、半壊の親せきの家に身を寄せていますが、同じ状況の19人が同居しているため、狭い廊下に寝袋を敷いて寝ています。ですから「爆撃がない停戦中に、睡眠と栄養を取っておかない」と思っています。

私たちの団体には、複数の児童館、青年センター、女性センター、本部事務所などがありました。どの施設も破壊されていて、女性センターは全壊、ナワール児童館は天井と壁がなくなっています。7人の職員が犠牲となり、22人が肉親を失い、99%の職員は家を失いました。児童館の子どもたちや各センターの利用者にも多くの犠牲者が出ました。

それでも、2023年の10月13日から緊急支援を開始しました。「パレスチナ子どものキャンペーン」からの資金協力もあり、物資や現金の給付、炊き出し、子ども支援、家族支援、避難所の運営を続けてきました。現在は児童館など施設の改修に向けて動き出しています。

米国のトランプ大統領の発言により、ガザの市民は2月15日12時の「期限」で停戦が破れ、戦闘が再開されるのではという恐怖を抱えています。何が起こるのか、不安です。

米国とイスラエル、周辺国や国際機関が「復興支援」について発言をしていますが、誰も当事者であるパレスチナ人の声を聴こうとしないのはおかしいことです。例えば、テントの搬入は許可されていますが、必要なのはコンテナやプレハブです。そんなこと一つから始まり、全てについて私たちガザ市民の声を誰も聞かずに、自分たちの都合で話を進めているのは納得がたいことです。

子どもたちのパフォーマンス (2024年12月31日)



ガザの市民社会は NGO を中心に、15か月間の緊急状況の中で、人々の生活を支えるための様々な活動を独自に実施してきた実績と自負を持っています。2023年の10月以降、海外からの資金協力を突然止められた現地 NGO もあります。しかし危機的で物資が乏しいにもかかわらず、私の団体だけでも5,000人の人たちの日々の生活を支え続けてきました。

私たちが求めているのは、まずは停戦が継続されること、そして私たちの尊厳が守られることです。つまり私たちの人権が守られることなのです。



子どもたちの描いた絵



建物が壊されても精神は生きている

フィダ・シュラブさん (アトファルナろう学校渉外担当。2月8日インタビュー)

ガザ市のアトファルナろう学校と「聴こえのクリニック」、クラフト工房などの建物は、残念ながら大きく破壊されました。一時停戦が始まってから、私自身徒歩でガザ市まで行ってこの目で確かめてきました。ホールは全壊し、クラフトショップも、本部も、幼稚園も、毎年1万人以上が来訪していた聴こえのクリニックも瓦礫になっていました。クラフトで働いていたろうの職員たちはみな泣いていました。何か残っていないかと瓦礫の中を探していた一人が、無傷のマグカップを見つけて大変喜んでいました。工房で作っていた「ガザ」とロゴが入っている陶器です。それをみると、アトファルナの精神は生きていると思います。アトファルナは建物ではないのです。ガザの障がい者や私たちが作り上げてきた一つの家族、尊厳を守るコミュニティなのです。

ですから、ガザのろう者のゴッドファーザーだったハーシム・アブガザレさんが、夫人とともに爆撃で犠牲になったことは大きな損失です(ハーシムさんは工房の家具部門の責任者で1995年来日)。ハーシムさんの娘のニダとワエルも重傷を負い、ニダは歩けるようになりましたが、ワエルは片手を失いました。手話でコミュニケーションをとろう者にとって、片手を失うことは大きな痛手です。またメンテナンスの職員やスピーチセラピーのボランティアなども亡くなりました。

ブシュラさんという14歳の生徒も亡くなりました。危機的な状況でもアトファルナでは、ガザ市内の安全な場所で補講を続けていました。彼女はその通学途中で爆撃に会い、一緒にいた母親と共に亡くなりました。その少し前に、父親から「食べるものがないので助けてほしい」というメッセージを受けていたのですが、届けることができたのはブ

シュラが亡くなって1週間後のことでした。彼女はひもじい思いの中で犠牲になりました。

炊き出しには障がい者が参加



聴覚障がいなど障がい者は、情報へのアクセスも移動手段も制限されているため、逃げ遅れ爆撃などに巻き込まれることが多くて、新たな障がいを併発する可能性がとても高いのです。聞こえないだけでなく、手や足も失った人、またその反対に聴力を失った人もたくさんいます。

アトファルナはろう者の教育機関ですが、この危機下で、障がい者以外の人たちへも食料配布や炊き出し、心理サポートを続けています。ガザ中部だけでなくガザ市と北部での活動も本格化します。例えばパレスチナ子どものキャンペーンからも支援いただいている炊き出しでは、現在毎日6000食を提供しています。

15 か月の危機下の生活と想い

聴こえのクリニックでは補聴器や電池などの支援も続いています。例えば補聴器を支援されて初めて自分の赤ちゃんの声を聴いたというお母さんもいました。しかし、補聴器や電池も搬入が制限されてなかなか手に入りません。

驚くことに、歩行に必要な車いすやステッキさえも、イスラエル側の許可が必要で、ほとんどガザに入ってきていないのです。そのため、シャワーやトイレに簡単に行けない身体障がい者の中には、食べ物や飲み物を減らしたという人がたくさんいます。多くの障がい者は移動ができないために支援へのアクセスができないままです。

また心理サポートに加えて、少しでも収入を得ることができる活動へ特に障がい者が参加できるようにしています。ハラさんという女性は家族を失くし、ふさぎ込んでコミュニケーションを取らなくなっていました。彼女には補聴器のほかに、布と糸を渡して刺繍ができるようにしたら、他の人とコミュニケーションを取ったり、笑顔を見せるようになりました。

必要なのは、尊厳のある生活を取り戻すことであり、希望をもたらす支援だと思います。

避難先で制作しているハンドクラフト



ドローンに追いかけてまわされる恐怖

ナダさん (ガザ市に住む NGO 職員。2月9日インタビュー)

一時停戦になり、昨日南北を分けるネツアリム検問所からイスラエル軍が撤退したことで、ガザ市では物資が戻ってきました。缶詰だけでなく生鮮食品が市場に出回り始め、価格もだいぶ下がってきました。またプロパンガスの制限配給も始まり、焚火ではなく煮炊きができるようになりました。銀行はまだ閉じたままで現金は引き出せませんが、「パルペイ」アプリで買い物もできるようになりました。



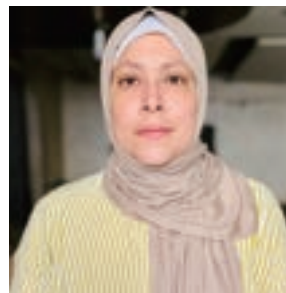
しかし、私の家のあったアパートは海岸に近くて、その辺りはすべて破壊され、戻ることができません。私は15か月間に25回も避難を繰り返しました。最初の避難の時には本当に何も持たずに逃げ、その時は2週間の間、水も食料も手に入れることができませんでした。またある時は逃げ込んだ場所が3回ほどイスラエル軍に包囲されてしまい、狙撃兵のいない時を狙って、食べ物を探しに行くという生活をしました。私は高齢の両親と妊娠していた2人の義理の妹たちと、甥姪など7人を抱えていて、その面倒を見なければならなかったのです。

というのも二人の弟が爆撃の犠牲になったからです。その一人は妊娠している妻のためにビタミン剤を探しに行っている途中で道で亡くなりました。たくさんの遺体が放置されている中で4日間探し回り、弟を見つけました。救急車を呼びましたが、

戦車がそばにいて近づくことができず、近くにいた人になんとか助けてもらって弟の遺体を現場から引き上げて病院の安置所に収めることができました。とても辛く厳しい経験でした。

2023年の冬は1枚のブラウスだけの着の身着のまま、毛布もありませんでした。常に背後にスナイパーを感じていて、上空にいるドローンがゾンビのようにどこまでも追いかけてきて何をすることも監視されていました。そして普通の市民、女性・子ども・老人に攻撃してくるのです。本当に悪夢のようでした。インターネットも遮断されていました。現在もドローンは飛んでいます、夜間だけで、また無音のドローンに変わりました。

義理の妹の一人は肝炎になっていて、母乳を与えること



全ての人が健康問題を抱えている

ルブナ・サバハさん

(母子保健事業パートナーのNECCの渉外担当。2月12日インタビュー)

ガザ市には60万人が戻ってきました。しかし大変厳しい状況で、中部や南部に数万人が戻ったといわれます。またトランプ大統領が言及した2月15日に何が起るのか、人々は不安を抱いたままその日を暮らしています。

NECCの職員の中では、昨年秋に助産師で妊娠中だったワラさんが犠牲になりました。また2023年秋に9人の肉親を亡くし自身も重傷を負った心理士のブドロスさんは、中部の診療所の活動に復帰しましたが、重いトラウマに苦しんでいます。NECCは車両も2台失い、残った1台も調子が悪くて修繕しながら使用しています。

妊婦さんへの簡易調査の結果では、少なくとも10%の妊婦でかなり重い栄養失調が見られ、5%の産後女性に重い栄養失調が見られます。検査キットが手に入らないため貧血の検査はできないのですが、戦争前に75%の妊婦に貧血が見られたことから、状況は想像つくところです。国連からの配給は、量も少なかったうえに豆の缶詰と小麦粉が中心で栄養が偏っていました。したがって、クリニックではマルチビタミンや鉄剤、ハイカロリービスケットなどを配っています。物流量が増えたとはいえ、野菜も卵も大変高価です。トマトが1キロ100ドルと聞きました。ほとんどの人が収入を失くしている上に、給与をもらっている人たちも、現金を引き出そうとすると30%もの手数料を取られる状況です。

ができません。そういうお母さんがたくさんいて、パレスチナ子どものキャンペーンが支援をしている母子保健センター(次のインタビューのNECC施設)で粉ミルクや栄養剤を貰っています。ガザ市のほとんどの医療施設は破壊されるか、運営できなくなっていて、特に妊婦や乳児を抱えた家族の頼れるところはほとんどなく、このクリニックは命綱になっています。

爆撃や砲撃があった時、人々はひとまず逃げましたが、また戻ってきて道路の瓦礫を取り除き片づけていました。いま米国の大統領が、ガザの住民を追い出して復興すると言っていますね。でもここは私たちの土地です。壊されても殺されても私たちはここにとどまります。

ガザ市のクリニック



昨年夏にポリオワクチンの接種キャンペーンがあったとはいえ、いまでもポリオが発生していると聞きます。栄養失調だけでなく慢性疾患の患者さんも多くて、薬剤の入手には非常に苦労をしているところです。妊婦、乳幼児、子どもたち、そして大人・・・すべての人が健康問題を抱えていて、膨大なニーズがあります。

NECCでは、中部のクリニックのほかに、ガザ市の本部と以前研修に使っていた旧市街の建物の被害が比較的少なかったため、クリニックを2カ所で再開しました。また同じくラファでの診療所も再開しています。今後はジャバリアやベイトライア等のガザ北部でも診療所を立ち上げるつもりです。パレスチナ子どものキャンペーンの支援に感謝しています。



ミルクの配布



子どもたちの未来が とても心配だ

ハリールさん(K・写真左)とワリードさん(W・写真右)
(当会の職員、2月10日インタビュー)

K 昨日、ガザの南北を分けていたネットアリの検問所からイスラエル軍が引き上げたため、車両での大移動が始まっています。人々は全ての家財を自動車や、ロバ車（ガソリンやディーゼルは大変高価のため）に乗せて移動していますが、大混雑により30分で行ける距離に5時間以上かかります。

ガザ市とガザ北部についていえば、食料は以前より増えて、状況は改善されていますが、家がない70万人の行き場がありません。北部ではインフラが壊され、また貯水池も壊されたため、水不足が深刻です。2キロとか3キロ歩かないと水が得られない状況です。私たちはガザ市と北部でも給水支援を始めています。1日1万リットルの給水を始めましたが、トラックの確保を進めていてあと2台追加する計画です。

W トラックによる給水では到底間に合わないので、破壊されていない井戸を探して水をくみ上げることも計画しています。モーターがガザに入ってくるのを待っているところです。人々が住む場所も必要です。がれきやごみを片付け、半壊の家に住めるようにする掃除用具や洗剤も必要です。テントやブルーシートでは暴風雨を防ぐことはできないし、夏の猛暑にも耐えられません。

K 一時停戦になったとはいえ、私たちはその日暮らしをしていて、先行きを考えることはできないし、次に何が起こるか不安しかありません。テントひとつをとってもどこに立てるのか？場所もないのです。道で寝ている子どもたちがたくさんいます。道路状況もひどくて、歩きでも以前

の2倍の時間がかかります。

W 高齢の親たちも家族も北部に戻りたいというので戻ってきました。「においが違う」と子どもたちは言いますが、家が壊されて持ち物が何も残っていないのを見るとふさぎ込んでしまいました。

K 以前の家は一部使えるので、ブルーシートで囲ったものの、昨夜の雨で毛布も私たち自身も水浸しになりました。周辺には不発弾がいっぱい埋まっているのではないかと考えると子どもたちを外に出すこともできません。それに近所の仲良しの子どもたちのほとんどが犠牲になっています。「〇〇君はどこにいるの？〇〇君はどうしているの？」と聞かれても答えようがなく、「どこにいるんだろうね。どうしているんだろうね。」というほかありません。



炊き出しを受け取った子ども

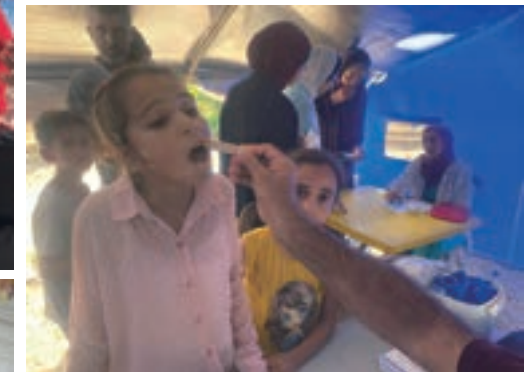


ごみの山で
使えそうなものを探す子ども (UNOCHA)

子ども支援



寺子屋支援



中部のクリニック



自宅のがれきの上で

W 子どもたちの心理サポートや教育も緊急の課題です。子どもたちをここで育てることができるのかも大変気がかりです。私の子どもは小学生と中学生ですが、学校が2年以上ないので、教育が失われています。

K 家族のことを考えるとプレッシャーもありますが、人々のために何かできているという実感が私たちを支えてくれていると思います。そして私たちの活動を支えてくれている日本の皆さんには感謝しかありません。

ご協力に心から感謝申し上げます。

ガザ支援

市民の皆様と団体からのご寄付や助成金等のご協力により、
以下のような支援が実施できています。

- 物資配布：2023年10月～現在 4,000世帯以上に食料と生活物資を配布。
- 現金給付：2023年10月～2024年夏に800世帯に現金を給付。
- 子どもと家族支援：2023年10月～現在 のべ10万人の子どもに遊びや心理サポート、学習支援を提供。2万家族に心理サポートを提供。
- 給水支援：2023年12月から現在まで400日以上毎日給水を続け、5,000トン以上を提供。
- 炊き出し：2024年1月から現在まで400日以上、毎日の炊き出しで34万食以上を提供。
- 保健支援：2023年10月以前から継続して、毎日500人以上（乳幼児、子ども、妊婦、大人）が受診。
- 物資搬入：2024年にエジプトとヨルダンから約3,000世帯分の飲料水・食料・毛布等の物資をガザに搬入・配布

レバノン避難民支援

皆様からのご寄付により、戦火が拡大したレバノン南部、東部、バイルートなどの
避難民や避難民を受け入れたコミュニティ2,000世帯に食料を提供できました。

引き続き、ご支援のほど、どうぞよろしくお願いいたします。